

157

特 248
461

通州兵変の真相

同盟
小員

流血脱出手記

附
北支
事変
從軍
記者
陣中
日記

10円

森田書房版



始



特248
461

安藤同盟
特派員
流血脱出手記

通州兵變の真相

森田書房版

— 附北支事變從軍記者陣中日記 —



目次

安藤同盟 流血脱出手記 (通州兵變の真相)……………(一)
特派員

一、戸外の銃聲に熟睡を破らる……………(一)
二、あゝ絶望、遂に發見さる……………(四)
三、愈々死刑、念球繫ぎで銃殺場へ……………(六)
四、脱出、高粱畑の中に遭難第一夜……………(七)
五、萬事休す、再び保安隊に見出さる……………(九)
六、幸運、暗夜を幸ひ再び逃亡……………(二二)
七、助かつた、電話を通じて懐かしや同僚の聲……………(二四)

附 北支事變從軍記者陣中日記……………(二六)

安藤同盟
特派員 流血脱出手記

通州兵變の真相

◎戸外の銃聲に、熟睡を破らる

通州兵變勃發以來男子としての最初の生還である安藤同盟通信社記者は、四日間に亘る苦闘の身をベツトに横へつゝ、戀ふ暇も惜し氣に左の手記を綴つた。以下その手記――

記者は萬死に一生を得た歡喜と、不幸な運命に遭つた同胞に對する哀悼の悲しみと、全く相反する二つの感情に混亂しつゝ、この手記を綴つてゐる。記者は去る七月二十七日午後八時某部隊のトラックに同乗を許され天津より通州に入つた。二十八日戰歿者の告別式に參列、同夜は

日本人旅館近水樓に投宿した。

二

事變突發以來、連日の活動に疲れ切つてゐた記者は、同旅館の二階の一室で熟睡してゐると二十九日拂曉——午前四時頃でもあつたらうか——戸外の銃聲に熟睡を破られた。一發、二發——銃聲は劇しくなる一方だ、何事？ と飛び起きた記者は直ちに電話機にとびついたが既に電線は切斷されてゐるらしく全く不通である。程なく西門、南門の方角に當つて殷々たる砲聲が起つて只事ならぬ氣配だ。宿泊人や女中等十九名は一團りになつて不安に慄え乍ら戸外を窺へば濛々たる黒煙白煙が上つてゐるのか曉闇に仄かに見える。記者は廿九軍の逆襲か、保安隊の叛亂か、或は藍衣社共產黨の仕業かなどと考へてゐると、近水樓の附近にも弾丸が雨下し始めた。庭の池の直ぐ向ひ側に在る冀東政府の廳舎とも最早連絡がとれなくなり記者は完全に詰になつて了つた。

夜も全く明け放れた午前七時半頃我が軍の飛行機が一機飛來するのを認めたので稍々安心すると同機はそのまゝ飛び去つて了つた。未だ變事の突發を知らぬのだと直感した。その中にも砲聲は益々激しくなる、遂に近水樓の五、六間先の邊りも拳銃の音が聞えた、と思ふうちに隣

家にも拳銃の音が起る、不安の裡にも耳を澄ませて聞くと聞き覚えのある保安隊の拳銃の音だ、之で漸く事態を覺つた。窓硝子を透して戸外を窺ふと保安隊丈けではなく、黒服黒帽の學生團も混つて拳銃をとこる嫌はず發射してゐる。午前九時半頃一時銃聲が止み一安心した處へ入つて來た近水樓子飼のボーイが第一報を齎した。聞けば邦人の居留する北平館、旭食堂の前には日鮮人が多數彈丸に墜され、鮮血に塗れた屍が累々としてゐるとの事である。

一同危険の迫るのを覺悟してゐると十時頃から又復銃砲聲が轟き始めた、一體それは何處から何處に向けて撃つてゐるのやら全然判斷が付かない。やがて冀東政廳の邊りから盛んに帽子に白線を付けカーキ服を着た保安隊がやつて來る、「撃つな、撃つな」と頻りに學生團、藍衣社を追つてゐるらしい、併し一向背き入れる容子もなく、黒服の學生隊が近水樓の近くに押寄せ笛を合圖に掠奪を開始し、遂に彈丸が家の中へまで飛來して來た。一同二階に脱れ疊を上げ心細い防禦陣を構へたが、危険極まりないので屋根裏へ上らうとの提議で十九名の内十一名は屋根裏へ上つた、記者もその中の一人である、聲を呑んだ沈黙の時間を過ごし乍ら、小窓から見ると學生が掠奪する有様が手にとる様に見える。椅子、机、お客さんの鞆等なんでも手當り

三

次第に持つて行く。最初は仲間に加はらなかつた保安隊まで、掠奪を始めた。すると一階、二階に残つた人々の處にもピストルの音がし始め、騒然として來たので全く生きた心地もない。只管呼吸を呑んで小さくなつてゐた。その内に板戸や唐紙を外す音が聞えてきた、今まで侵入の目的は掠奪だとばかり思つてゐたが、何ぞ圖らん殘酷な邦人虐殺がその目的であつたのだ、我々の生命は遂に風前の燈となつて了つた。併し幸なる哉、彼等は我々の存在に氣付かず一旦引上げて行つた。

◎あゝ絶望、遂に發見さる

しばらくすると宵服を着た股長官の衛隊が陸續として入つて來た、彼等は遂に我々の屋根裏に氣がついて了つた。駄目だ！ もうすつかり諦められた！ 隊長らしいのがつと首を出しピストルを突きつけ乍ら「我々は君等を保護するから金を出せ」と言ふなり屋根裏に飛び上り女中一人を抱き降ろしてその指輪をもぎとる様に奪つて了つた。みんな五圓十圓と金を出した。すると今度は屋根裏から降りる手傳ひまでして呉れる。降ろしておいて今度は身の廻りの物を悉

く剥ぎとり始めた。記者は腰に付けた寫眞機、ポケットの中の百圓許りの金、シャープペンシル、ハンケチまで取上げられたが、中でも一番閉口したのは眼鏡をとりあげられた事で近眼の記者には致命的な打撃たつた。息を殺しつゝそれ迄の経過を記した、手記や若し殺された場合にと書きつゝた遺言等も悉くとられて了つた。但し不思議に洋服やネクタイだけは残してくれた。それから片手を麻縄で縛りあげられ十一時頃じゆうづ繋ぎになつて二階から下へ降されたが、入口のところで多數の邦人の死體を見て戦慄すべき運命の迫つてゐるのを直覺した。裏に引づり出されて、隊長が「決して心配するな、生命を救ふ方法がある」と言ふので半信半疑乍ら外に手段とてなく萬事を任かせることとした。勿論周囲には護衛隊が銃劍を凝してゐて逃げ隙は無いので一同大きな茶椀に水を汲んで次々にのんだ、末期の水の心持ちなのである。それが済むと引立てられ官廳の一室へ連れて行かれ軒下に腰を下させられた、其處には主として鮮人が七、八十人我等と同じ運命を待つてうなだれてゐた。見れば西脇翼東教官の女秘書その他可憐な子供達も混つてゐた、一體どうなることか見當も付かぬが奴等の話を聞いてゐると「結局射たれる」と言つてゐる、また隊長が現れて「城門内の銃殺場へ連れて行く」と宣言した

◎愈々死刑、念珠繋ぎで銃殺場へ

愈々死刑だ銃殺をやるんだなと覚悟を決めた、引き立てられて行く途中朝鮮人の中に聲を上げて泣くものもあるが、日本人はお互ひに「みんな覚悟しませう」と云ひ合つて最後の決心を固め肅然としてゐる。路地を幾つも曲つて愈々銃殺場へ着いた。銃殺場には十間位の堀が掘つてあり、これを渡ると銃殺されるもの立つ臺が幾つもある、四邊にはグロチスクな洞穴があつて全く陰惨を極めてゐる。記者は先頭に立ち總勢十一人が登つた。全部かたまつて土手の内濠に立つた。すると矢庭に向ふ岸の二十名ばかりの敵が銃を構えて狙撃の姿勢をとつた。その瞬間誰か判らぬ女の聲で「逃げませう——」と絶叫した。その途端ハット我に返つた記者は豫めゆるめて置いた手の縛を外して四五尺の城壁の上に躍り上つた。「バン、バン、ヒューン」と虚ろな音が追ひかけて来る、記者は向ふ側の城壁に飛び付き二丈餘の石崖を夢我夢中で猿のようににがり降りてゐる、銃聲は猛烈に追ひかけて逃げ遅れた邦人の運命が閃光の様に記者の脳裡を二閃した。午後二時半頃でもあつたらうか、かくて記者は脱出行の第一歩を踏み出したのだ。

家増を降ると藪の中を北に向つて一散に走つた。濁つた三十間許りの川が流れて居る、ドンブ
リ跳込んで五、六間潜つた、頭を上げると銃聲は間近に聞えるので又もぐつた儘泳ぎ続けた。
對岸に泳ぎついて又走る。づぶ濡れの服が重い、夢中で章太天走りを続ける事四五十分、銃聲
は尙追つかける様に断続する、その内に村落らしい處に來ると村民が「やあ逃げる奴がゐるぞ」
と追つかけて來る、その中に「ものを置いてゆけ」といふ聲も聞える、村民はどん／＼追ひかけ
て來る。ネクタイを投げ續いてズボンを呉れてやつた。すると追つて來るのを止めた、次の村
に入ると又追はれた。

◎脱出、高粱畑の中に遭難第一夜

今度は上衣をやつてしまつた。それから盲滅法約二時間シャツとパンツの裸體姿で小山を越
え河を渡り。藪をくゞり惡戦苦闘を続ける、渴を醫すために泥水を呑み一直線に走る中午後六
時近く恐ろしい水溜りの藪の中に入つた。追手が來る様子もなくこのあたりなら先づ大丈夫と
腹の中で始めて一休した。少し落ち付いてからソツト藪の中から出て通州の方を眺めると、

は黒煙濛々と立ち昇つてゐる。通州に残つてゐる邦人の安否を氣遣ひ、通州一帯の混亂を想像しながら更に足に委せて午後八時頃までひた走りに走つたが遂に眞暗闇となつたので、止むなくその夜は附近の高梁畑の中に潜り込んで眠られぬ遭難第一夜を明した。身體は綿のやうに疲れてゐるが、昂奮の爲に眠られず、畑を渡る風の音、高梁の葉音まで何か身邊眞近に追跡の手が迫つたやうな錯覺に捉はれ、食物がないので道々唐もろこしを生の儘で嚼り近くの畠から芋を掘つて来て食つた。水も河の水や溜り水を飲んで辛うじて喝を醫したが氣が張つてゐたので別に苦痛も覺えなかつた。斯くて第二夜も高梁畠のなかで眠つた。藪蚊の猛襲には閉口した。黄金蟲の飛んで來るのが飛行機の爆音のやうに聞えたり、高梁の風にそよぎ姿が支那兵に見えたり、神経は針の様に尖るばかり、眼鏡が無いので高梁が兵隊の様に見えたり、また通州に残つてゐる邦人の姿の様に見えたりする。二日目は幸ひ誰も追跡するものが無かつたが絶へず追跡されて居る様な心地は去らず不安のドン底にあつた時、運悪くヒョコリ畑の中で保安隊と出遭ひ突然向ふから發砲された。左耳を掠め、二發目は右耳を掠めたが幸ひ體には一發も當らず目茶／＼に逃げた。

八

◎萬事休す、再び保安隊に見出さる

斯くて二日目も殆んど寝ず、三日目は朝からの豪雨にぶ濡れになり乍ら丘陵を下つて來ると間近に一軒の小屋を見付けた、様子を窺つて見ると池の鯉を獲つて暮してゐる漁夫の親子三人の棲家で脱出以來人間に逢ふのは之が始めてだ。オツカナピツクリで話し掛けるとズブ濡れの記者を見て同情し、五尺四方位の小屋の中に寝かせてくれた。パンと粟飯を御馳走になつたが生れてからこんなうまい飯は喰べたことがない、鱈腹喰ひだめして午前十時頃漁夫の親子に感謝の別れを告げ再び教へられた通り通州街道の方に向つて雨の中を出發した。雨は降るし眼鏡がないので視野が利かず、忽ち道を間違つて右に行つていゝのやら左に行つていゝのやら彷徨状態に陥り全く絶望を感じた。九死に一生を得たのだから何んとかして北平に辿りつき通州事件を報道せねばならぬ勇氣を振り興しやつと或る村落に出た、その入口のところまで百姓に遭つたので危いとは思つたが道を訊ね漸く通州街道らしいところに出た、メめたと思つてその方に曲らうとすると、突然傘をさした二人から「誰か」と呼び止められた、保安隊とは知らず近付

九

いた時は既に遅く銃を操せられ泥濘に足をとられ動けず、これまでの努力も水泡かと観念した。彼等は通州附近の部落を占領してゐた叛亂保安隊の中でも最も強猛な兵變の中心部隊だつた。記者は有無を云はせず兩手を後手に縛り上げられ引立てられた、足が滑るので時々坂道を轉んで頬や顎を泥の中にたゞきつける。遅いと銃の臺尻で尻を殴られ拳銃で背中を突つかれ、散々虐待され乍ら保安隊が七八十名屯してゐる食料品店らしい所に引摺り込まれた。それから彼等は記者に對し「お前は敵人と言ふ事を知つてゐるか、命は貰ふから」と宣言した後、荒縄を稍緩めて幾分か手の自由を與へ食物を呉れたり御湯を飲ましたりして呉れたが、一體彼等がどんな氣持を持つて居るのか、それを聞き出さうと色々話かけて見たが、どうも之等が通州兵變の有力分子らしく、言ふ事はどうも共產黨の指令で動いてゐるのではないかと思はれるかと思へば、蔣介石が總動員令を下して鄭州で指揮してゐるとか逆宣傳をすつかり信じ込んでゐるらしい。

兎に角抗日意識は實に熾烈であつた、記者はなほ職業とか年齢とか或は何處から來たとか聞かれたが、最後に何か長い相談の結果、午後四時頃彼等は愈々記者を銃殺するに決したらしく中の一人が「お前は三十三で最後だ、覺悟をしろ」と言ひ渡され、十數名の射撃隊の案内で農民に引き立てられて約十町離れた高粱畑の傍に連れて行かれた。彼等の話を聞いて居ると日本人が直ぐ後ろの山まで來て居るので銃聲を聞かれては都合が悪い。それと反對の方に連れて行つて銃聲により自分等の位置が分らぬ様に氣を配つて居るらしい。斯くて記者は死に直面したが神佛の加護か昨日の銃殺に一弾も蒙らなかつた僥倖が信念となつて何だか異様な氣がしてならなかつた。

◎幸運、暗夜を幸ひ再び逃亡

最後に高粱畑の角から後向きに道に沿つて向けと言ひ渡された、手は縛られてゐたが射撃に自信のある彼等は綱をはなして四、五間遅れて歩いて來る途端ズドンと一發發射された、記者は無意識に身體を揺つて見たが當つて居ない、射つた方は一發でやつけたものと思つたらしくもう弾丸は來なかつた、氣が付いた時弾丸はやつぱり當つて居ないことが判つたので後手のまゝ、高粱畑の中へ向つて第二の逃亡を開始した。後からは「跑了(逃げた)」と言ふ大聲が自分

を追ひかけて来る、彈丸の音は物凄しい音を立てゝゐるか記者の體には一發も當らない。彈丸には當るものではないと言ふことが一つの信念となつてしまつた。例によつて約二時間位一直線に走つた、機關銃の音は執拗につけまはるし犬までが追かけて来るには參つた。

高粱畑に逃げ込めばつかまらぬと考へ相手の来るのを案じつゝ一寸靜かにしてゐる方が得策と考へて身動きひとつせず夜に入つた、雨は愈々激しくシャツとパンツでは寒く膝がガタ／＼震へ足先きはシビレ切つてしまつた。どうしても雨は防がねばならぬと唐蜀黍の幹を四方八方から集め合せ之をスツポリ被り、にはか作りの今宵の我家を作つた。高粱を敷き、濡れては居るが、豆の葉を足の方に掛けて全くズブ濡れのまゝ疲れて居るので何時のまにか眠り込んでしまつた。四日目の朝の太陽はキラ／＼輝いて眩しい位に日を射つて来る。我軍の飛行機が悠々朝空の靜寂を破つて飛來する、すつかり氣強くなり、夜營に馴れて熟睡したので元氣も恢復した。今日こそはへまをやらすに一氣に北平に入城と覺悟を決めて小高い丘に登り高粱畑の上を越して遙かに西山方面へ目標を定め最後のフンペリを見せて眞直ぐに歩き出した。人聲がしたり、人影が見えたりする方は危険で近付けないので、迂回しなければならぬが目標をともし

ば誤り勝ちだ。かくてやつと通州街道を五里位の所まで来てゐる、趙家莊に辿り付いた頃は流石足の衰の痛みも激しく連日の疲も手傳つてどうにも進めない。止むなく農家に恐る／＼近づいて救を求めた、夫は迂散くさいと見られて吠られる、婆さんには「乞食はあつちへ行け」と怒鳴られ仕方なく人だかりのしてゐる他の百姓屋に辿りつき、暴動、殺害、脱走の模様を告げ「三日も食物をとらなかつたから何んとかしてくれ」と頼み込んだところ大いに歓迎され、十數人の部落民がポロ／＼の粟餅、大根漬、蜀黍等を持つて来てくれた、夢中で喰ひ溜めをした。それから百姓の奇智でほんとの農人姿に變裝することになり汚い襦子(ズボン)に穴の開いた袖無しを引つかけ襷目のある古帽子をかぶつて扇子を持ち支那靴を穿き道案内までつけてもらつて勇んで出發した。この姿で二十分程歩いたがどうにも足が運べず、痛みが募るし遂に中途から無一文であつたが、巧みに騙し込んで車を雇ひ南方人になり濟まして乗込んだ。然し朝陽門外に辿り着いたとしても車賃の事などで化けの皮が剥げるのではないか、又保安隊に捕まるのではないかと一通りの心配では無かつた。

◎助かつたぞ、電話を通じて懐かしや同僚の聲

平生から城外最^{さいせん}端^{たん}の電話の所在を知つて居たので、直ぐ様飛込み同盟避難所^{たいどうひなんじょ}の正金銀行を呼び出し先づ生きて居る第一聲を送つた、電話口に出た津田(同盟記者)も「生きてゐるのだ」との一言にすつから昂奮して居たらしい。受話機をガチャリと下した後の氣持は何とも言はれない。城門通過の交渉が纏まるまで保安隊の目を避けるため陸軍基地に入り其處で事情を話したら朝陽門外は案外危険がないことを聞いてほつとしたが相當テロに脅え切つてゐることを直感した、大使館の自動車が来たことを丸腰の保安隊員^{ほあんたいがい}が通知してくれたが、これは一寸蒼蠅^{そうじやう}くなるかと心配しながら、今までの百姓服を脱ぎ棄て、新に與へられた長い支那服に着換へて保安隊員の肩にもたれ乍ら城門に向つた。

来て見れば瞭つきりとは見えないが、懐しくも同僚小出君の聲が聞えるのでホツとした。城壁の上からはバンザイバンザイの喚聲、記者の名を連呼してゐる、助かつた。萬感交々胸に迫つてはふり落ちる涙を止めることが出来ない。城門は土囊で固められてゐるのでロープで引上

げてもらふことになり、特務機關員の堀内氏におぶさつて愈々待望久しかりし北平入りの目的がやつと達せられるのだ。聲を揃えて引き上げてくれる感激の響を次第に身近に聞き乍ら滅入り勝ちな心に弾丸に當らなかつたことは兎に角貧弱な體で萬難を排しよくもこゝまで來られたものだ。之は決して自分の力だけではない、記者の安否を繞つて心配してくれた皆様の加護があつたればこそとロープに吊られ乍ら城壁^{じやうへき}の中間を通る頃泌々と考へた。記者は本當に九死一生ではない、萬死に一生を得たのだ。待ちに待つた北平入りが出来たのだ。

北支事變從軍記者陣中日記

○彼我對峙の最前線上空を飛ぶ

〔豐臺にて同盟齋藤(桂)特派員〕 記者は十五日ブスマス機に搭乘約一時間に亘り戰雲去來する前線地帯を観察した。午前十時半〇〇飛行場を出發先づ一六〇〇米の高度をとつて北平上空を飛ぶ、一帯の緑の沃野の中に城壁に區切られた北平の市街が小さな棋盤のやうに見える。百、二百と高度を下げると、市街の整然たる屋並がぐんぐんと大きくなつてアカシヤの並木が美しく眼を射る、北寧線の列車が玩具の様に走つてゐる。更に高度を上げて南苑飛行場に向ふ、何處に飛去つたか飛行場には機影を認めず只赤土が強い日光を反射してゐるだけだ。

更に舵を轉じて永定河に沿つて南下、問題の地蘆溝橋に向ふ。高度七百米、永定河の左岸に

も右岸にも支那軍が築いたトーチカがはつきりと見える。最初に支那軍が不法射撃を行つた龍王廟も眼下に浮び上つて居る。蘆溝橋も第廿九軍の據る宛平城も見える、二重の門を持つた小さい城の中には楊柳もまばらだ、然し城壁の中にはとつくに後退した筈の廿九軍の鼠色の制服が右往左往してゐる、我が軍が約諾に基き撤退して小部隊のみを留めてゐる一文字山とは僅かに四百米の距離だ、一文字山の上空を半周して歸途につかんとすれば皇軍の兵士が日章旗を大きく振つてゐる、何たる感激、涙が自然に頬を傳ふ。速度を増して一路歸還、〇〇飛行場に着陸、時正に正午。

○月光冷やかに無心、無氣味な一文字山の一夜

〔豐臺にて同盟齋藤(正)特派員〕 十八日再び豐臺に到着した記者は夕刻〇〇部隊の好意で我が豐臺最前線に向けトラツクで出發同地にて一夜をあかすことが出来た、途中西方五里の敵前てつぜんで車を捨て徒歩で一文字山に向ふ。この時既に薄暮はあたりの樹々を蔽ひ何處に隠れてゐるかわからぬ便衣の支那兵がひそかに身に迫るやうな思ひである。

行くこと約十五分で一文宇山に達した。高地に立つて望めば前方一帯五百から千米の彼方には左から宛平縣城の楊柳を隔てた蘆溝橋、激戦の跡を語る龍王廟から衙門口、八寶山等總て夕闇の中に薄曇のやうに淡く描き出されて打ち見たところ平和な風景であるが、今はその静けささへ一抹の無氣味さを含んでゐる。最左端にそり立つ宛平縣城の城壁に眼をとめれば僅か三日前まで東望樓の下から北西城壁の下へかけて繁茂を誇つてゐた樹木が一本も残らず伐り倒されその代りに堅固な濠が築かれてゐるではないか、これが城内治安維持のためにだけとの約束で駐屯する保安隊のやつたことなのだ。明かに二十九軍の不法な敵對行爲、我々は思はずその不備に對して固く拳を握つた。夕暮の靄が次第に濃くなり濃紺の帳りが蒼然として四邊をつゝめばいつの間にか輝きを増した水の如き月光は靜寂な前線陣地を冷たく照し出す。

我が兵はまだ僅か三ヶ月の訓練しか経てゐない初年兵だが雄々しくも月光を浴びて歩哨に立ち残るは總て不敵な落着きの中に豪膽にも銃を枕に悠々と野營の夢をさへ結んでゐるのだ。既に持參の握り飯も食へ終へ西瓜のデザートも終つて我々も一服と云ふ深夜、午後十一時過ぎ突然宛平城方面から一發の銃聲が響いた。パーンと静けさが破れた途端、營門溝からも八寶山か

らも續々射ち出して來た、敵の連夜相つぐ不法射撃とはこれだなと思つてゐると更に續いてパーンと響く迫撃砲、野砲まで撃ち出す始末、熄んでは撃ち、撃つては止み、銃砲弾は一文宇山から西五里の地點にかけて五發六發と土煙りをあげて落ちてくる亂暴さ、思はず首をすくめて地上にしがみつく若い兵士が傍らで「新聞記者殿、如何です」と笑つてゐる。

我が方はその不法に對して一發の應射さへ加へず隱忍自重してゐるのみなのだ。十九日の曉が訪れてほのぼのと明けかゝるうちにも砲聲は未だ歇まずに續く半日も一日も経つたように感じた、數時間を送つた午前六時宛平城東方の敵の壘壕附近で轟然たる音響とともに一條の火柱が天に沖した。さすがに膽を冷してのびあがると何事ぞ！これは敵軍自身が敷設した地雷火を自ら爆發させてしまつたのだつた。濠のみならず、地雷まで布設して露骨な不法敵對行爲を繰り返す敵を前に靜觀忍耐する我が軍の嚴たる態度は思はず我々の眼をうるましめたものだ。この夜わが陣の受けた砲彈十數發、損害は幸ひにしてない。午前九時銃聲の息むを待つて非常な感激のうちに豊臺へ引返す。

◎山と積む敵の不發彈、膺懲撃破の跡を訪ねて

〔天津にて塚原同助特派員〕 堪忍袋の緒を切つた鐵槌的膺懲射撃がすんで無氣味な沈黙の一日は過ぎた。廿一日から廿二日にかけて一文字山―豊台―天津―北平を一巡する

△一文字山

嚴重監視の夜が明けた、眼を射るやうな晴天の下に廢墟のやうな城壁が黒く浮いてゐるやうだ、望樓は無惨に打ち碎かれて昨日までの偉容はない、執拗だつた長辛店高地の砲兵陣地もすがくしい丘陵にしか見受けられぬ、時折土囊を積む支那兵の半裸の姿が哀れをとめてゐる、激戦を忘れた將兵達はあれ程のスリルも全く感じてゐない様だ、嚴然と立つてゐる監視哨のほかは皆熱し切つた砂上に高鳴を響かせてゐる、わが陣地内で拾ひ集められた敵の不發彈が山と積まれて後方に運ばれる、間歇的な不法散彈は今日も止まぬか「いくらでもやつゝけてやる」と筒井部隊長の赫顔がますます紅潮する。

△豊台

膺懲射撃も僅か一日で目的を達して懐しの古巢○○司令部に立ち戻つた河邊部隊長以下前線との連絡に緊張の度は豪も緩めない、昨日の死傷者を送つた後の喪愁はさすがに深いが兵士達は黙々自己の任務に邁進してゐる、糧食が前線に運ばれる通信隊が張り切つてゐる。

△豊臺、北平（北寧線）

三十七師の黄村方面よりの進出が喧傳され、黄村の南方六里固安方面への軍隊集中が取沙汰され北寧線の不安は又しても増強したとのデマが亂れ飛んで乗客の車窓に映る不安氣な顔色も見逃がせないが日没近い平原を北進する列車は何も變つたことはない。日の丸を附けたトラックが砂塵を上げ 走つて行く、頸紐を外した兵士の姿が頼もしく丘上に見える、沿線の部落も何時もの同じ楊柳が北東風にゆれてゐる。問題の黄村附近も何事もなく列車はひた走り走る。ハイアライのネオンと中原公司の高塔が見え始めて乗客の安堵のさゝやきが湧く

△天津

支那人街は宋哲元、張自忠、陳覺生等の暗殺説等傳はり、デマの巢窟だ、全く話にならぬ風説が流布されて彼等の神經を徒らに高ぶらせる、支那人街からの避難民が後を絶たぬ、大事さ

うに金庫を胸に抱えたもの、大風呂敷の包を背負つたもの、おかしいことには寢寢を持ち出したもの等々口々にわめきながら佛租界、伊租界等に雪崩を打つて行くが彼等は一體何處に行かうとするのか、淺ましい群衆心理の一端をまさしくと見せつけられる。夜に入つても蒸し暑い街頭の散歩は人影もマバラだ、白河だけは濁り切つて何時もと同じだ、冴えた月光が靜かに映し出されてゐる。

△北 平

二十日午後から夜にかけての股々たる砲聲が耳朶に残つてゐる、愈々靜まり返つた北平の聲戒も或は嚴めしくなり或は緩和されたが花街は全く鳴りをひそめてしまった。

◎喜んで手を振る農民達、撤退第一列車便乗記

二十九軍撤退の第一列車に記者は周參謀と笠井顧問との諒解を得てたゞ一人、辦事所長の專用列車により事變動發最初の平漢線運轉列車にて北平西停車場まで乗ることを得た。車中これも我が士官學校出身の周參謀が「何もありませんが……」と夕食をすゝめてくれたので特別食

堂車のお客様といった形で七時四十五分蘆溝橋を出發、汽車は後に機關車をつけ前方に白旗を掲げたまゝゆる／＼と走るが、途中支那部落の農民たちは久振りの汽車を見て安心したものか手を振つて列車を見送つてくれた。八時四十分煌々と電燈の點いた北平停車場に下車したが、こゝはホームから驛を出るまで明日の撤退の準備のためか第二十九軍の兵士で一杯、僅か十六七歳の少年もまじり鐵砲や荷物運びに忙しい。兵の人垣の中を進むと迂散臭いと見たがガチャ／＼と青龍刀や短銃をならし、ピカリ／＼と懐中電燈を照らし出したが特に一人の將校が先導してくれたので漸く無事正陽門を潜ることが出来た。

◎「蘆溝橋砲音やみて月高し」戦ひの跡に月見の雅宴

天地を轟かした砲音も今はやんで二十九軍が白旗を掲げて撤退した二十二日夜は折から満月だ、連日の奮戦にまだ戦塵も落さぬ牟田口部隊もこの夜はさすがに陣中のゆとりを見せ、昨日の戦場に卓を圍み老酒を酌み交して床しい月見の雅宴を催した。こゝは北支第一の月の名所蘆溝橋畔こんもりと揚柳のかけからゆつたりさしのぼる十五夜の月は水のやうな青い光を靜か

にひろげてやうやく高く高粱畑を濡らし遠く夢のように縣城を照らす興至つた牟田口部隊は
先づ筆をとつて、

露 營

蘆溝橋砲音やみて月高し

次いで歌一首

蘆溝橋夕陽に映える望樓も砲音絶えてあとかたもなし
とやれば續いて隙附の森田中佐は「戦場の夕陽」と題して

戦場に砲音やみて大行の夕陽映ゆる山の彼方に

と和する、遙か彼方峨々として連なる大行の山なみも今ひややかな日光の中に浮んでゐる河野
副官がとよめに一首

夕鳥の行方をしばしのぞみあれば委失せにき望樓の空

斯くて風雅な武人の饗宴は満月中空にかゝる頃まで續き更けるにつれて戦場の隅々に鳴く轟
の音は高く澄んだ。

◎武士の情、塹壕に隠れて、敵の撤退第一列車を送る

日本側の要求により今次北支事變當面の責任者たる馮治安部隊はいよ／＼三十七師をあげて
保定附近に撤退に決定、その先發隊として北平城内の劉汝珍部隊の一部が廿二日午後六時廿分
正陽門平漢線驛を出發し、同五十分我が〇〇線一文字山の直前を通過、保定方面に撤退した。
この日朝來特に専用客車を出して鐵道電話の修理指揮に當つた平漢鐵路駐平辦事務所長獨致權
笠翼察顧問等によつて夕刻漸く修理が出来た、蘆溝橋驛から出發したとの報が傳はり夕陽の西
苑方面に一條の黒煙がなびくと見るや總て十里程の緩い速力で列車の近づいて來るのが見えた
我が軍は監視將校以外は「武士の情だ、撤退する敵を見るな」と全部頭を低く塹壕内にかく
れる、吐く煙も力無げに牽引する舊式な機關車には白服の機關手がゆるく白旗を振り二十八輛
の貨車（内有蓋貨車六輛）には濃藍の服を着た二十九軍の兵が青龍刀も短銃も背後にかくした
儘ぎつしり顔を並べてちつと我方を凝視してゐる、此の部隊は我軍とは一戦もせず西苑にあつ
て待機してゐたものらしいが、いまや敗殘の兵として我が軍の前を通り行く心情を思へば流石

に氣の毒にもなる、嚴重な監視下に遂に一發の銃聲もなく列車は夕陽を浴びて張辛店方面に向ひだん／＼小さくなつて行つた。見送つた我が前線の兵達の口からは思はず深い吐息が洩れた。この第一列車は張辛店で二十二日夜編成替へして保定に向ふ豫定であるが、この列車で送られた兵は砲兵一個大隊、迫撃砲一中隊、兵約千名と稱されてゐる。なほ第二第三列車は二十三日午前七時と九時第一列車同様正陽門西停車場出發の豫定である。

◎永定の流れも今は和やか、機上から戦ひの跡を見る

〔天津にて同盟高雄特派員〕 血腥い硝煙の匂ひも蘆溝橋の戦闘を最後として次第に薄らぎ、さしもの三十七師の支那兵も逐次後退を開始し再び明朗な北支の黎明が訪れんとしてゐる。廿四日特に支那尉屯軍の好意で機上から戦ひの跡を視察する機会が與へられた。午前十時記者とカメラマンは天津郊外惠通公司格納庫から引出されたスパー機に案内役の岩崎少佐と機上の人となる、高度千米、視界二十杆、無風快晴にして多少のガスありと言つた絶好の航空日和だ。天津は瞬く間に過ぎ遙か彼方に霧を通して熱河の山々が見える眼下は緑の毛氈を敷いたような

曠野の中を濁水を湛へて曲りくねつた白河が豊かに流れてゐる。

この流れに沿ふて支那式に不完全な細い街道が走つてをり鐵道線路だけが一直線に伸びてゐる。通州を過ぎると直線を描いた北平の城壁が眼につく、馮治安の三十七師が頑強に挑戰的態度を示した八寶山は丁度線の楕圓形の饅頭を置いたやうな恰好の山だ。機上からは不鮮明ながら敵の砲壘がぐる／＼と廻らされてゐるのが箱庭のやうに見える。この邊りから遠く綏遠の山奥から發した永定河の流れが見え出し、やがて蘆溝橋の鐵橋と人道橋にかゝる「あれが一文字山だ」と指す方を見れば砲弾に打ち倒された楊柳、吹き飛ばされた陣地の無残な跡が眞夏の陽に照りかへつて戰禍の佻しい姿を曝してゐる、撤退を最後まで背んじなかつた宛平城ものんびりと兵の姿らしいものが見えて、今は和平の光りに平靜な營みに入つてゐるやうだ。

平漢線の要所長辛店は黒々として汚らしい街々を横へ停車場には列車の姿さへ見へずこれも静まりかへつてゐる、堅固な砲兵陣地を構築し蘆溝橋戦に頑強に抵抗した敵陣地が緑の島の中に黄色い線を描いてゐる、こゝがつひこの頃宛平城の望樓と共に砲撃の目標となつた處で大部分は我が軍の砲弾の洗禮を受けたらしく荒廢の跡があり／＼と判る。突如機體が大きく横に揺

いだ地上では飛行機を眺めながら人々の走る姿が見えスワ何事かと緊張したが、これは歸還する爲に急旋回したのでと判つて、やれ／＼と胸を撫で下ろす。この頃から焼けつくやうな地熱のための上昇氣流で猛烈に動搖を始めた機は一直線に北上空を過ぎて南苑に出た青い丸い屋根の宮殿が見える、黒い煉瓦を規則正しく並べたやうな建物が兵營なのだ。

飛行機だと云ふので看視兵らしい支那兵があわてゝ兵營に飛びこむのが見えたと思ふと黒豆のやうな支那兵がボロ／＼と兵營中から轉ぶやうに出て來た、一時はよほどさわめいたやうであつたが、軍用機でないと判つたものらしくおかしな程の騒ぎも漸く収つた頃、機は既に南苑を去り北寧線に沿つて一路天津に向ひ前後二時間に亘る視察飛行を終つた。

◎月明の下に鐵舟の浴槽、故郷の唄を吟む勇士達

〔豊臺にて同盟齋藤(正)特派員〕 廿三日酷熱百二十度のまつ青な空には焼け爛れたやうな太陽が狂つてゐる。昨日に引續きけふも早朝より撤退の支那軍列車が一文字山直前を喘ぐやうに通過保定に向つた、機關車には白旗が垂れ蓋貨車の支那兵はみな銃を空に向け恭順の意を表して

ある、前線の空氣は頓に和み緊張のうちにもホツとした面持の勇士たちは事件勃發の去るじ日夜來始めて渴望の風呂にありつき半月にわたつた戦塵を洗ひ落す臨時の浴槽は渡河用の鐵船、その三隻を一文字山後方約百米の部落においてあるが湯は附近の泥水を汲み込んで湧かしたもので始めから赤土色に濁つてゐる、しかも順番を定め後がつかへる慌しい入浴だが兵士達は何よりもの御馳走に嬉々として飛びこみ戦友同志垢を流し合ふのもお互ひに生き残つたなあといふ感じだ、折柄十六夜の月が明るく出てすが／＼しい光を笑みかけるやうに投げてゐる、勇士達の口からは知らず／＼久しぶりに軍歌や故郷の歌の一節が飛び出してゐる、明晩からは濾過器を通し綺麗な水に入れるぞと聞いて「パンザイ」と叫ぶ無邪氣、見廻つた筒井部隊長もニコ／＼して此の光景に眺め入つてゐたが「何か御馳走せにやあ」と首を傾げた結果「さうだ、アイスクリームを」と頷いて早速後方に傳令を走らせた。「アイスクリーム充分に送れ」湯上りにシャツを取換へた兵士たちに夜風は流石に涼しく月はいよ／＼牙を返つて蟲の音もきこえるほど靜かな夜だ。

◎馬鈴薯を握つて子等は狂喜、いぢらしい北平籠城風景

籠城に兵糧は附物だが北平籠城が始つたのが二日前の廿七日正午、餘り突然の引上げ命令であつたため食料の手配はうまくいかなかつた、事變發生と同時に居留民會は當然籠城を豫想し兵糧の買込みだけはしてゐて日本人會に運び込んであつたのだが、さて引揚げとなると民會の役員連中はそれ／＼仕事を持つてゐることではあり家族もあるので糧食運搬の方には十分手が廻りかねた。そこへ持つて来て運送機關が支那側の手にあるので實の所甚だ心細い次第であつた。愈々籠城といふので俄か作りの窯が作られ勇ましく握飯が婦人達の手に握られて配給された。「記者の方は出勤されるのだから澤山食べて下さい」と民會の役員は親切に言つてくれたが何しろ半煮えだつたり焦げ臭かつたりする上に副食物は梅干と大根に醬油をつけただけであつてはその親切だけを有難く頂戴する始末だつた、その翌日は幾分炊出し技術が進歩したとは言へ相變らずだつたが三日目の廿九日となつて愈々城内の兵が保定に向け撤退し、市内には一兵の影さへ見えぬといふので民會では此の時とばかりトラックを飛ばして日本人俱樂部から馬鈴

薯、玉葱に牛肉といつたものをワンスと運んで来れば子供達は大きい馬鈴薯をにぎつて「パンザイ」と呼ぶいぢらしさ、役員達も今夜はウンと「御馳走します」と牛肉と薯で張り切つてゐるのも戻ぐましい籠城風景である。

◎八里台激戦の跡を見る

今廿日朝九時半記者は快速自動車愛國號に便乗を許され廿九日の激戦地八里台に一番乗をすることを得た、同乗者はいづれも小銃を擬し或は手榴弾を手に握る、兵五名と他に記者二名、海光寺の兵營を出て運河を渡り右に折れ南開女子中學の方面に行くこと約五丁、昨朝我が空軍が猛烈な爆撃を浴せた敵陣地は高粱畑に隠れて海光寺兵營を目掛けて續け打ちをするには最もよい場所だ、我軍はこのために非常に苦心した場所だといふ、運河の堤には頭骸骨を割られた支那兵が所々に倒れてゐるが既に腐爛して臭氣を放つ。一千メートル程前方には保安隊が未だ處々にかくれてゐるのだ、こゝから引返し無氣味な部落を通過して八里台に向ふ、危険に晒されてゐるわが中日學院は今完全に我軍によつて警備されてゐるが我軍の最前線はこれより約

〇〇米先だ、五六名の兵が土堤により重機銃を固く握つて寄らば打つぞの構へ「御苦勞さん」と叫んでその前線を突破すればそこは昨未明わが堀部隊が集圍して進む敵軍を〇距離よりの追撃により殲滅的打撃を與へた奇勝の場所、堤防側に敵兵の死體が散亂してゐる、運河の中には死體、馬車、小銃が一しよになつて沈んでゐる、南開大學の門前に到れば校門前には鐵條網土囊が設けられ未だ便衣隊が潜んでゐるさうな光景だ、昨日午後三時頃の爆撃に校舎は半分吹飛んで排日教育の心臓部が全く破壊されたと云ふ感じだ。

八里台部落にはまだ殘兵が潜伏してゐる氣配なので警戒してゐると案の通り先方に便衣隊が顔を出した、その途端記者の傍にゐた兵が銃の引金を引いた「ドン」といふ音と共に便衣隊は姿を消した、昨夜も盛んに日本租界に射撃して來たところまだ風の様に部落に喰込んでゐる敵兵はまだ相當に残つてゐるらしくいつ奇襲に出るか判らない、こゝから先へはまだ危険で進めないで止むなく觀察を打ち切り引返したが我軍攻撃の確實な奮闘ぶりには驚嘆させられるばかりであつた。

◎廢墟の街を歩き、東站到激戦の跡を見る

〔天津にて猪肢同盟特派員〕 天津東站を襲撃した支那の敗殘兵が三十日午前八時頃やつと退却したと聞いた、記者は激戦の跡を見るべく單身天津の東站到り込んだ、東站は伊太利租界西側の第三特別區にあるので記者は今朝白河に架けられたばかりの軍橋を渡つて、先づ伊太利租界に入る。静まり返つた街の辻々には鐵條網が張られ物々しい警戒で伊太利租界と特別三區との境界線は殊更に嚴重だ、歩哨の前をつか／＼進んで行くと「誰だ！」と誰可される。「日本の新聞記者だ」と答へると笑つて「どうだ」と云ひ乍ら鐵條網の一部を開けて早速通して呉れた。

今度の事變を最も善く理解してゐるのは伊太利人だ。それだけに伊太利租界内の通行は些かの不安も感じない、どうかと思つてゐた境界線も伊太利兵の好意で突破する事が出來た。一步入れば愈々特別第三區だ、どの家も立退いた後で銃は固く下ろされ空っぽになつてゐる。往來を歩いてゐるのは記者一人だけだ、今にも物蔭から逃げ遅れた便衣隊が狙撃しはしないかと氣が氣でない、不安に驅られて何時の間にか小走りに走つてゐた記者は驛構内の壁に突當つたり

した擧句、驛前廣場に出ようとする瞬間きよつと立ちすくんだ。東站を襲撃した廿九軍兵の屍體がベツトリ血まみれに染まつて此處に三つ彼處に五つと鋪道の上にごろ／＼轉がつてゐる、緑や黄色の便衣を着た屍體には蠅が一ぱいたかつてゐる。二三間先の店先に倒れてゐる便衣兵は未だ腹をビク／＼させてゐる。勇をこした記者は屋内に入り込んだ、薄暗い家の内には家財道具が散らばつて敗殘兵等の掠奪の跡を物語つてゐる、中庭の方では水道が破壊されて水が瀧の様に流れ、生き残つた家鴨が三羽水を浴びてゐたが足音に驚いてガア／＼と鳴き立てる。驛の建物と敗殘兵達が占據してゐた向ひ側の民家とは廣場を隔て、約四十米位の間隔でその間で猛烈な市街戦が演ぜられたのだ。この一週間位前までは賑やかだつたこの街も今は全く廢墟と化し、蜘蛛の巣のやうになつて垂れ下つた電線、大きく穴の開いた壁、壊れ落ちた屋根が折柄の雨に叩かれてゐるのも昨日の激戦をまさ／＼と偲ばせる。驛構内には長時間の戦闘に疲勞しきつた我が兵士達が土間の上に眠つてゐる。

正義の守備につく皇軍兵士の勞苦を思ふ時、思はず感謝と感激の念に胸が塞がつた。破壊をまぬかれた郵便局の廳舎の中へ記者が入りこんで行くと日本軍が十數名守備してゐた。丁度そ

の時一人の外人が二十數名の支那人を連れて入つて來たがその外人はクレッチー氏と云ふ伊太利人局長で將校に今から仕事を始めたからと許可を得て夫々部署についた、記者が刺を通じるとクレッチー氏は

「郵政は人類の公器を預かり國際的な仕事だ一刻も停止してはならない。併し自分は日本軍の今回の行動を正當なりと認識してゐるので、日本軍の行動の邪魔にならない様一時局員と共に退いてゐた。幸ひ我が局舎に損害も無く又日本軍の援助によつて事變直後に仕事が始められることは誠に感謝に堪えない」

と記者の手を握つて嬉しうに語つた。

驛の裏手の方からは尙未だ盛に砲聲が聞える、此の戦亂の中に雄々しくも局員を激勵して郵政の神聖な事業を復活させようとするクレッチー氏の眞剣な態度に胸うたれた記者はこの廢墟と化した特別三區の一角から早くも復活の力強い脉搏が打ち始めたのを感じつゝ日本租界へ歸還した。

◎敵艦を拿捕した〇〇艇同乗記

〔天津にて菱刈同盟特派員〕 大沽沖合の海上に壯快な一夜を送つた記者は三十日午前七時三十分白河沿岸偵察の任務を帯びる溝口大尉の〇〇艇に同乗を許されて白河を溯航する。造船所附近にまで来ると敵の砲艦が青天白日旗をなびかせてゐるのを發見する、溝口大尉之を拿捕すべく速度を上げて敵艦に近づく、不思議なことには敵艦發砲せぬ。近づくに従つて無数の彈痕があり／＼と見え、敵の砲艦海燕號なる事が判明する。我軍の猛撃に居たゞまらず艦長以下全員艦を見捨て、逃亡して了ひ、主無き艦は漂流を續けてゐたらしい。記者は溝口大尉に續き拳銃を握りしめて同艦に乗込む。艦長室の扉は開けつ放され、餘程あわてたらしく室内は目茶目茶だ士官室には重要書類は皆置き放しになつてゐる。我が軍の猛撃は恰も兵員の食事中に加へられたらしく飯が四散してゐる。士官室から重要書類、航海日誌、命令書等を押収、軍艦旗を降して大尉に手渡した、この無人の敵艦を曳航しつゝ白河を下れば間近に見える太沽兵營は全く廢墟と化し煙突は折れ兵舎は焼け落ち、潰された砲壘の間からは累々たる殆體が見える。河

口を外れると附近に碇泊中の我が商船の甲板では日章旗をちぎれる様に振つて凱旋を祝してゐる。

◎限りなき不安と危機を包んで、夢の如く暮れ行く北平市街

悪鬼の如き支那兵によつて惹起された廣安門事件の爲北平一帯の地は廿六日夜來最惡の事態に直面するに至り北平在留那人二千餘名の籠城生活が遂に開始された。大使館區域への引揚げ命令に我が居留民街は廿七日午前中は不安なざわめきを見せてゐたが正午過ぎからは通州、豊臺方面にかけ遠雷の様な砲聲が北平の空を揺るがし始めた、空には我が軍の飛行機が一機、また一機去來するこの頃から追に出好きな支那人も次第に街上から姿を減じて行く、昨日までさつと開かれてゐた各城門は廿七日朝來再び閉鎖されて了つた、また各門樓上の兵員も著しく増員された。支那軍は刻々兵數を増加し市中の警察局の巡捕や武装した保安部隊までが土嚢を築きバリケードを構築するなど、もの／＼しさは一層加はるにも拘らず市中は無氣味な程の靜けさに陥つて了つた。夕闇漸く迫る頃再び南苑と覺しき方角に當つて殷々たる砲聲を聞く、遙か

に見れば我が飛行機一機が旋回また旋回の後グツと機首を下げて急降下するのが遠望される、目のとつぷり暮れる頃砲聲も止み我が空の精銳も根據地に歸つたらしい、かくて夢のやうな静けさのうちに限りない不安と危機を醸しつゝ北平の夜は戒嚴令下に更けて行つた。

◎人ツ子一人通らぬ死の街北平市街

明くれば二十八日、北平市内の唯一の高樓北平ホテルの屋上から市内を俯瞰すれば今日の北平は銃聲、砲聲、飛行機の爆音以外一切の音響から解放された形である。四、五日來の炎熱の後をうけて雨あがりの今日は薄曇りで涼しい、見渡す限り西山の山脈の輪廓をクツキリ浮き出させ、暗紫色の色も凄しい位だ。樹木に蔽はれた市街の所々の家には中立國を示す外國の旗が翻る、各病院には赤十字旗が掲げられてゐる。電車、自動車、人力車の交通は一切杜絶されホテルの真下にある北平の銀座街たるモリソンストリートにはピストルの引金に指をかけた公安局員が緊張した顔で右往左往し昨夜二十九軍が拵へた塹壕の中には兵隊の形は見えない、北平を取巻く南苑、西苑、北苑の支那兵營方面で聞えてゐた砲聲も現在(午前九時)には殆んど静

かになり時々響く砲聲も大分遠くなつて行つた。飛行機も既に引揚げた、大部分の支那軍は西方八寶山方面に一齊退却中の模様だ。

◎望樓上に爆撃戦を観る、戦火の國際都市天津

廿九日午前二時暴戻飽くなき支那軍の我が租界砲撃に始まつてから九十二時間、天津市は殷々たる砲聲に包まれ果敢極まりなき我が軍は壯烈な市街戦を隨處に展開、支那軍を撃破したが、執拗そのものゝ支那軍は依然攻撃の情勢を捨て午後二時に至り途むなく意を決した我が軍は斷乎空爆を開始した。記者は直ちに〇〇の六十呎の望樓上の上に我が空の精銳の果敢且つ精確無比の爆撃状態を具さに觀戦した。耳を壓する我が砲聲と、かき立てる様な機關銃の掃射の合間々々を我が精銳機の爆音がつないで天津市は凄壯な戦雲の中に姿を没して了つた。見はるかす屋並が銃砲聲と爆音に戦のゝく上空を、約一千米の高度を保つて我が飛行機が大きくく旋回をつゞける、と見る間にサツと體形が變つた。我が機からは黒い卵の様な爆弾が七つ八つ――息を呑む間も無く華麗な建築を跨る南開大學がバツと黒煙に包まれる。次の瞬間に

は見るかげもない醜い残骸に變つてゐる——この南開大學にこそ昨夜まで支那軍が集結虎視眈々夜襲の機をねらつてゐたのだ。空に相呼應して記者のすぐ眼下には皇軍が砲列を布いて軍司令部の西〇〇米を距たる部落に集結してゐる支那軍に猛射を浴せてゐる。灼きつく様な炎熱に我が將兵は皆裸體の姿だ、砲口がパツと火を吐いたかと思ふと、はるかなる彈道の先の青い川圃に包まれた部落は忽ち火炎に包まれる、猛射に居たゞまれず逃げまどふ敵兵の姿が手に取るやうに見える、その部落と砲列の間をかひくゞるやうにして来る一塊りの部隊が地に伏しては又起き上り我が方がめて進んで来る、進んでは伏し、伏しては起きやがて先頭に立つた一人がサツと日章旗を翻へす、租界外の邦人避難民だ。十字砲火の下を潜つての雄々しき避難行だ女も子供も混つてゐる、大膽と云はうか不敵と云はうか砲火を潜つてのその決死的行進には流石の我が將兵も度膽を抜かれた形だ。北方に眼を轉ずると三個所に亘つて盛んに黒煙が上つてゐる、その上空をわが飛行機が悠々と旋回しては時々サツと機首を下げて爆撃を敢行してゐるギラ／＼とどぎつく光る夏雲と物憂い黒煙とが異様な對象をなして筆舌につくし難い凄惨な感とを與へる。

やがて迫る夕闇と共に銃砲聲も漸く止み、戦亂の街天津におし被さるやうな恐怖の夜の帷が下りた、支那街日本租界、佛租界の繁華な電車通りも今夜は全く死の街と化しネオンサインも電飾も無い。只淡い街燈の下に警邏の皇軍兵士の銃剣が光つて、兵を乗せたサイドカーやトラツクの疾驅が折々不気味な静寂を破るだけだ。

昭和十二年八月六日印刷
昭和十二年八月九日發行

通州兵變の真相

定價十錢
(送料三錢)

著者

安藤同盟特派員
東京市麹町區有樂町二ノ二

發行者

森田益雄
東京市芝區新橋三ノ二〇四

印刷者

發行所 株式會社 森田書房
東京市麹町區有樂町二ノ二

全國配給所

電話銀座(67)二五二三番
和洋東京一九二一七番

月刊「話の話」
雜誌「旅行の雜誌」
「オールニユーモア」
「茶街」發行

北部配給所

新潟縣三條市田島三三四
森田書房北部支社

京阪神特約店

大阪市北區東梅田町六
大阪參文社

〔特約〕 東京鐵道局公認 (鐵道保養會・鐵道弘濟會・鐵道授産會)

出版部から

一、一般大衆の時局指導書としてパンフレットの存在は萬人に認められつゝ、あります。次から次へ現れる新しい情勢を正しく把握して戴くことが我が出版部の任務であり、全國民共同の責務でもあることを固く信じてゐます。

一、現代人が知らんと慾する凡ゆる問題に關して明解な答をする爲め森田書房（時局研究部）は、今後全力を傾注し、政治評論に於ても、經濟、社會問題に關しても、又進んで國際關係に於てもそれぞれ日本の第一人者を動員して、全國の皆様に満足を與へて行く念願であります。

若人よ來れ

益々有望な新職業
電氣溶接時代表

新

興技術の職業に先鞭をつけて成巧せよ

就職容易……一生安心！

▼中學を卒業してから大學を出る迄には六ヶ年と凡そ五千圓の學費を要します。そして卒業して右から左へ就職するものは何割かであつて多くは就職難の爲め苦しむ態です。

然るに電氣溶接學校は僅か三月の日子と百圓たらずの學費で卒業が出来る学校です。就職率が百パーセントと云ふ素時に入學が出来る学校です。それが高小學校卒業程度の本科に入學が出来るとは、世の青年達に天から出来ればた願ひではないです。卒業後は勤める事も出来れば立も出来る。青雲の志ある者何ぞ見のがしてよいものですか。

出世の早道

將來有望……他に比類なし！

▼電氣溶接の發明こそ、全人類に偉大なる經濟的利益を齎した金屬結合方法の一大革命であります。耳を蔽ふ所の騒音を發する鐵結合、即ちベトナム打に代るべきものであり、實に機械的結合方法を發見した現代科學文明の賜です。造船、建築、橋梁、鐵道、自動車、飛行機其他あらゆる金屬工業に應用せられ前途實に有望限りなきものであります。

就職率最高

◎三ヶ月卒業◎毎月一日開講◎就職斡旋
◎學則要電券三錢

東京市京橋區銀座七丁目六

電氣溶接學校

375
765

月極購讀者集募

パンフレットは手軽に得られる新時代の新知識であつて、明日を
知り、明日に備へんとする現代人必讀の書である。

月極購讀(五冊)金五十錢
半ケ年金 三 圓 (送料共)
一ケ年金五圓八十錢(同)

地方より御申込みは
一ケ月郵税として別
に金五錢戴きます。
(合計金五十五錢)

特 典

(イ) 月極パンフレット五冊購讀者へはサービスとして月刊新よみもの雑誌「話の王国」一部進呈
(ロ) 名士の論評を始め時事問題の解説出版界の状況細大もらさず掲載の月刊パンフレット通信を無料贈呈します

申 込 所

パンフレット出版
話の王国
オールユーモア
茶 街
行 社
日本に於ける唯一の
パンフレット全国総配給元

話の王国社
森田書房
東京市麹町區有樂町二ノ二
電話(77) 發售部 二六三三
銀座(77) 發售部 一八六六
東京 發售部 一八六六
電話(77) 發售部 一八六六
銀座(77) 發售部 一八六六

終

